

# 排除型社会における北朝鮮バッシングをめぐるエスノグラフィー ——地方都市の中小企業従業員の事例研究

川端 浩平

キーワード：ナショナリズム、排除型社会、  
新自由主義、個人主義、地方都市、  
マジョリティ、在日コリアン

「しかし実際に、ひとは自分にとって一番大事なことを、つねに一番詳しく述べるものなのだろうか。」<sup>(1)</sup>

「まずは、内在的な転覆可能性を見つけ出すことが大切だ。それはなぜかという、誰も資本制の「外」にはいないからであり、一人ひとりが支配のサイクルを保持する運動機構に巻き込まれてしまっているからである。それゆえ、資本との共犯関係を強いられながら労働し生活することが、「自明」であり「当然」とされる状況から、支配に対抗しうる主体へと自らを生成させる変化がもとめられている。」<sup>(2)</sup>

## はじめに「包摂型社会」から「排除型社会」へ

2002年9月に小泉首相が訪朝して北朝鮮の拉致事件関与が明るみになって以来、北朝鮮や国内の朝鮮総聯を中心として在日コリアン・コミュニティに対するバッシングが吹き荒れている。しかし、それら一連の北朝鮮に関連する者たちに対するバッシングは、単なるレイシズムというだけではない。これは、その後バッシングの対象が「救

う会（北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会）」のメンバーへと向けられたことから明らかであろう。またそれらは、「働かない公務員」等へのバックラッシュなどもある種の連関性があるのではないだろうか。何かそれら一連の無節操なバッシング・ブーム自体が、包摂と排除の境界線画定のメカニズムとして機能するナショナリズム運動のように思われる。

近年の日本におけるナショナリズムの台頭やバッシング・ブームは、日本のみ起きた現象ではなく、1990年代より先進資本主義国では共通して見られた現象である。その背景には、産業構造の転換や福祉国家の解体にともない導入された新自由主義的政策によって生み出された、先進資本主義諸国のマジョリティの不安が渦巻いている。すなわち、先述した「救う会」や「働かない公務員」に対するバッシングには、過剰な保護を受けているとされる人々に対するマジョリティの不平等感覚が横たわっているのだ。そこには、新自由主義的政策がマジョリティに要求している自己責任の論理が投影されている。それは、すべての日本人は同等な条件の下で競争すべきだという個人主義的な発想<sup>(3)</sup>に基づいている。

それと同じコインの裏側が、北朝鮮に対するバッシングである。新自由主義的価値観を否定す

(1) レナート・ロサルド『文化と真実——社会分析の再構築』（椎名美智訳）1998年、8頁

(2) 崎山政毅『資本』岩波書店、2004年、102頁

(3) Kawabata Kohei, *Walking my Hometown: Practices of Everyday Nationalism in Contemporary Japan*, The Australian National University, Ph.D. Thesis, 2006.

この拙著では、新自由主義時代におけるナショナリズムと消費社会的な個人主義との連関性について理論的に整理している。

る独裁国家とは、日本のマジョリティを取り巻いている現状の価値観とは相反するものの象徴である。こうした何らかの例外を想像上の外部に設けることによって、ナショナルな共同体が成立するわけである。しかし、この表裏を成す二つのタイプのバッシングの構図は、表と裏といった単純な構造に収まりきるものでもない。例えば、マジョリティによる北朝鮮バッシングはその矛先が北朝鮮に向けられているというよりは、新自由主義的な日本社会に生きるマジョリティの人々自身が抱く「確立された個人」になれるだろうかという不安が投影されているに過ぎない。そうであるから、その矛先が北朝鮮政府とは直接に関係のない国内の在日コリアンへと向けられることも矛盾しないことになる。つまりそれは、「他者」に向けられたものであるというよりも、自分たち自身が見たくない現実や起こりうるかもしれない未来に対する不安や恐怖を、自分自身が内面的に抱える排泄物のような「おぞましきもの」(Abject)として「他者」へ投影しているのである<sup>(4)</sup>。

よって、そのような見たくない現実や未来に対する不安や恐怖が、北朝鮮や在日コリアンなどに向けられるという現象は、レイシズムという範疇のみに収まりきるものではなく、新自由主義時代におけるナショナリズムという、排除と包摂をともなった主体を統合する運動として捉える必要があるように思われる。オーストラリアの精神分析派の人類学者であるガッサン・ハージの言葉を借りれば、新自由主義時代に適応できるかどうか不安を感じている「内なる難民」(Refugees of

Interior) による「被害妄想的なナショナリズム」(Paranoid Nationalism) である<sup>(5)</sup>。「内なる難民」とはグローバル化と新自由主義政策に適応することに不安を感じているマジョリティのことである。そして、彼/彼女たちは、自分たちを不安にしている新自由主義政策に怒りをぶつけるのではなく、まったく関係のない「他者」に対する被害妄想を醸成してしまうのだ。

さらに重要なのは、そのような「被害妄想的なナショナリズム」とはマジョリティの不安を代弁しているわけだが、自分たちよりも弱いと思われる「他者」の存在を必要としているという点である。つまりそのような被害妄想は、国内外的にある種の「社会的排除」という例外を想像上に設けることによって機能しているのである。そしてこの北朝鮮バッシングにみられるような現代日本社会の「内なる難民」による「被害妄想的なナショナリズム」は、ジョック・ヤングが「先進産業国」における近代から後期近代への移行を特徴づけているものとして論じている「包摂型社会」から「排除型社会」への移行を反映している。ヤングは、福祉国家的な「包摂型社会」が浸食された原因として、コミュニティの解体による個人主義の台頭と既存の労働秩序の崩壊による労働市場の変容を挙げている。その結果、「包摂型社会」においては、「他者」は社会化され、更生させられ、治療されるべき対象として私たちの社会の一員とみなされていたものが、外部の敵として忌み嫌われる存在となったことを指摘している<sup>(6)</sup>。

本稿では、そのような「包摂型社会」から「排除型社会」への転換期において、一部の例外的

(4) 渋谷望「万国のミドルクラス諸君、団結せよ!?! —アブジェクションと階級無意識」『現代思想』vol.33-1、2005年、74-84、76-77頁

渋谷望は、ジュリア・クリスティヴァの提出した概念を援用して、アメリカ社会における人種主義の分析を行ったアイリス・マリオン・ヤングの議論を前提として、「おぞましきもの」(Abject)という概念を、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの転換後、あるいは中流社会幻想が消滅した日本社会に登場した新しいタイプの「他者」への排他的感覚を説明するのに用いている。

(5) Ghassan Hage, *Against Paranoid Nationalism – Searching for hope in a shrinking society*, Pluto Press, 2003, p. 21.

な「他者」をつくりだし、それを忌み嫌うようなことによってマジョリティの共同体意識を強めるという「排除型社会」におけるナショナリズムの分析を、マジョリティの日常生活のフィールド調査を通じて試みる。事例として、グローバル化のなかでますます疲弊していると言われている地方都市であり、調査者の「ホームタウン」である岡山で、高校時代の友人が働き、彼の父親が経営する下水の測量と設計のコンサルティングを行う中小企業の従業員を対象として扱い、一年間の参与観察型のフィールド調査を行った<sup>(7)</sup>。調査では、その時期にメディアを賑わしていた北朝鮮バッシングをめぐる従業員の語りとその背景にある歴史認識に焦点が当てられた。

「ホームタウン」の友人を選定したのは、私が直接的に知っている（あるいはそう思い込んでいた）ナショナリズムの主体や風景とは、そのような親密な関係にある人々や場所であるからだ。そして、この私たちが生活している資本主義的世界にはいまや外部はほとんど存在せず、まず私たちを取り囲む日常的な風景、街、人々の歴史性や社会性を回復することがもっとも重要なのではないかと考えるからである。よって本稿では、彼／彼女らを取り巻く日常の雰囲気にとっぴりと漬かるなかで、ナショナリズム実践のリアリティを従業員とともに経験することを通じて、日常生活のなかで実践されているナショナリズムに向き合い、批判的分析の方法を模索する。

## ナショナリズムって何？

### —ナショナリズムのフィールド調査の方—

調査者が行ったフィールド予備調査<sup>(8)</sup>で、山陽コンサルタント<sup>(9)</sup>の17人の社長と従業員に対して行った簡単なアンケートの一つ目の質問は、「ナショナリズムといたら何を連想しますか？」というものだった。さらに、「あなたはナショナリズムが必要である／問題であると思いますか？」という質問が続く。特に何も連想しない場合は、番号に○をつけるように指示した。このアンケートに対する答えは「なし」および空白が大半を占めた。残りの答えは以下のとおりである。

「わかりません」、「国家主義」、「国粋主義」、「ナショナリズムの意味があまりわからない」、「愛国心・戦争」、「ナチスドイツとかファシストムツリーニ?」、「戦争」

17人の従業員の以上のような答えには、昨今のナショナリズムに批判的な研究者や批評家が、ネオナショナリズムの台頭の象徴としているような石原慎太郎、小林よしのり、「新しい教科書をつくる会」といったアイコンは意識されていない。むしろ従業員の回答には、ナショナリズムという言葉が、あまりにも普段の日常生活とはかけはなれているものであるかのように意識されている。もちろん17人の意見は日本人の平均的な

(6) ジョック・ヤング『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』（青木英男他訳）洛北出版、2007年、28-31頁

(7) フィールド調査は、調査者がオーストラリア国立大学大学院の博士課程に在籍中の2003年1月から12月までの一年間行われた。調査方法は、参与観察によるもので、オフィスにデスクを与えられ雑用係として他の従業員とともに定時に勤務するというかたちをとった。なお、本稿で使用されている会社名・人物名等はすべて仮称である。

(8) フィールド予備調査は、2002年8月に一ヶ月間行われた。

(9) 山陽コンサルタント株式会社は、下水の設計・コンサルティングを主な業務内容としている。そのほとんどは、市役所や町役場等の地方自治体の依頼業務である。兵庫県神戸市の出身である真田航太郎社長が吉本氏（当時共同経営者、後独立）、吉田正男さん、植田利光さんとともに、1985年1月に岡山市内に設立し、現在の新築の2階建て住居型オフィスに移ってきたのは1988年である。調査開始当時17名（男性12名、女性5名）であったが、そのうち女性従業員1名が結婚退職して16名となった。

認識を代表するものではない。しかし、ナショナリズムという学術用語を、日常生活をしている一人ひとりの事例から捉え返してみると、従業員たちの回答は、研究者の用いるナショナリズムという概念を改めて問い直す必要があることを示しているように思われる。

グローバルな現象としてナショナリズムが台頭するなか、1990年代半ば以降の日本におけるナショナリズムの台頭はネオナショナリズムと名づけられた。例えば、精神科医である香山リカは、ネオナショナリズムの台頭を念頭に置き、2002年日韓共催ワールドカップをめぐってメディア等で「若者の右傾化」と名づけられた現象を根拠に、彼女の勤務する私立大学の学生を調査対象者として、学生たちがナショナリストかどうかを検証している。その結果、若者たちには「ぶちナショナリズム症候群」という診断が下された<sup>(10)</sup>。香山のナショナリズムに対する批判的なスタンスや意図とは別の次元の問題として、そのような診断について様々な角度から分析方法上の問題点を論じることができるだろうが、とりわけ指摘したいのは、実証研究を経ることなく、半ば演繹的に「ぶちナショナリズム症候群」という診断書が提出されていることである。このようにして研究者や批評家がナショナリズムを類型化することにより、分かりやすいナショナリズム主体のモデルを構築してしまうことによって、それらの主体を取り巻く現実のダイナミズムが単純化されてしまうとすれば注意をする必要がある。

そこで本稿では、個々の具体的な事例からナショナリズムを検証することによって、その実践の現在を批判的に考察する視角を確保することが重要であると考え。そのために調査者は、従業員の職場とプライベートの生活をともに経験することにより、生活世界の内部から彼／彼女ら

が実践しているナショナリズムの問題を検討するというスタンスを取る。とりわけ、フィールド調査を通じて感じられた、グローバル資本に圧倒される地方都市の中小企業に勤める従業員の被害妄想を構成している不安やストレスに焦点が当てられる。しかし、本稿で論じられる被害妄想に満ちたナショナリズムとは、直接的な暴力や暴言を孕んだようなわかりやすいナショナリズムではない。マイケル・ビリッグが論じているように、露骨な暴力や暴言のようなナショナリズムは先進資本主義国ではすでに周縁化された存在である<sup>(11)</sup>。それに対して以下で論じられる「被害妄想的なナショナリズム」とは、個人主義的かつ消費社会に適合的で、マジョリティの日常生活の雰囲気や乱したりするようなものではない。

## 山陽コンサルタント株式会社

山陽コンサルタントでは、調査者の友人の真田昭(28)(以下、昭)の父親である最年長者の真田航太郎社長でさえ1945年生まれである。戦後生まれの17人の従業員にとって、日本人であることの経験は、とても平凡なことなのかもしれない。そうであるがゆえに、日常生活を取り巻くメディアや人間関係などのナショナリズムの言説環境はとても平凡なこととして消費の対象となってしまう。そこでは、暴力的な認識をはらんだメディアや日常生活において流布されるナショナルな言説が、職場や家庭におけるコミュニケーションを潤滑にするためのジョークや蘊蓄の対象となる。

ところが、吉野耕作が指摘するように、従来のナショナリズム研究は「テキストのイデオロギー批判に終始して」おり、それがいかに消費されるのかという視点が抜け落ちている<sup>(12)</sup>。つまり、日常生活のなかでいかにナショナリズムが消費

(10) 香山リカ『ぶちナショナリズム症候——若者たちのニッポン主義』中央公論新社、2002年、5-10頁

(11) Michael Billig, *Banal Nationalism*, Sage Publications, 1995, pp.5-6.

という行為を通じて実践されているのかという視点は希薄である。よって以下では、従業員の職場における一日の時間と空間という文脈に沿って、ナショナルな言説環境を取り巻く従業員の雰囲気とその消費を通じた実践に焦点が当てられる。

山陽コンサルタントの一日は、従業員の出勤から始まる。私の友人である昭と一番若手の社員である吉田新(27)の二人は、アメリカ製のマウンテン・バイク「TREK」で通勤することがあるが、彼らも含めた他の従業員は、給料の大半を注ぎ込み、ローンで購入した自動車通勤する<sup>(13)</sup>。会社は、JR岡山駅のある岡山市の中心市街地から約3キロばかり西に離れた、郊外の住宅街にある。JRやバスのアクセスはあまり良いとは言えない。このあたりは、1950年代半ばからの岡山の都市化にともなう都市環境問題に対応するために制定された新都市計画法に基づき、1970年に設定された岡山県南広域都市計画区域であり、続いて施行された1972年から岡山県南広域都市計画区画整理の西端の一部に位置していて、組合施行で行われた区画整理は1988年に終了している<sup>(14)</sup>。また、山陽コンサルタントの二階建ての住宅風オフィスが建てられているのは、第二種中高層住宅専用地域であり、中高層住宅の良好な環境を守るための地域であると位置づけられている。そこに真田社長がオフィスに移したのは、ちょうど区画整理が終了した1988年のことである。バブル景気により会社の経営状態は好調で、従業員の数が増えたことを受けてのオフィスの移転であった。

都市のオフィス街の喧騒から離れて、田園地域

を埋め立てて形成された郊外の日常はとても静かだ。オフィスのデスクに座り、耳を澄ませると、住宅街ということもあり、「竹や竿竹」という物干し竿の行商の車のスピーカーから聞こえてくる男性の少し高い声が響き、上空の飛行機からは、コンベックス岡山というコンベンション・センターで開催されているイベントの宣伝をする女性の機械的な声が聞こえてくる。

## 通勤する

通勤にかかる時間はそれぞれだが、近所からシルバーのトヨタ・ウインダムで通勤する真田社長夫妻は5分くらいで、他の社員は約30分-40分くらいである。ただ、岡山市の中心市街地から国道二号線を西に約35キロばかり車を走らせた浅口郡から白のトヨタ・アルテッツァで通勤する武田裕美(39)は、朝のラッシュ時には1時間30分もかけて通勤する。彼女の家に家庭訪問した際に、通勤路である国道2号線バイパスを約60-70キロで走行しながら見えてくる風景をノートに記述してみた。そうすると運転しながら見えてくる風景そのものが、地方都市郊外に存在しているはずの豊かな自然を視界から追いやり、消費社会を象徴する広告へと変わる。岡山を東西に結ぶ丘陵地と平地の自然の風景を押し退けるように、それよりもさらに強烈な、ショッピング・モール、レストラン、パチンコ店、ラブホテル、消費者金融、ガソリンスタンドの広告が目飛び込んでくる。しかし、赤信号で停車してあたりを見回せば、やはりそこには自然が豊かな田舎の風景が広がっていることに気づく。

それでもそのような通勤経験は、高度に都市化

(12) 吉野耕作『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会、1997年、14頁  
「文化仲介者」としての真田社長の役割は、朝礼での挨拶以外にも、1996年4月から2000年12月まで発刊した社内報「井戸端」、その後から現在まで続く『イキキ通信』にも見られる。

(13) 従業員(雇用者を含む)のうち真田牧子を除く15人が自家用車を所持している。そのうち6人が一括払いで購入しており、他の従業員は給料の手取りの7%-25%を月々のローンの返済に充てている。

(14) 『岡山県南広域都市計画区画整理(岡山市)総括図——区域・地域・地区図No.3』1996年8月

した東京や大阪のJRや地下鉄の鮎詰め状態での出勤よりもはるかにのんびりしている。通勤の慌しさと疲労も、都市と地方ではかなりの違いがある。しかし先述したように、そのような日常の風景を参照にする言葉は、ガソリンスタンドや消費者金融などの消費社会における宣伝以外には存在しない。つまり、そのような日常の風景を語ることに、それを消費することが表裏一体になるような地方都市的なリアリティがあるといえる。その意味で、消費社会の言葉に頼らず地方都市の風景を語ることは非常に困難だ。

## 仕事開始

午前8時45分にパソコンにセットされたチャイムが鳴ると、従業員たちは住居型オフィスの2階にある会議室での朝礼のために集合する。社長を含んだ17人の従業員のお互いの顔が見えるように、壁を背にして起立した状態で朝礼が開始される。朝礼は、社員の朝の挨拶で始まる。これは、日替わりで順番交代に行われる。真田社長によれば、「コンサルタントという職業柄、人前で自分の意見を伝えることができるように」という目的で始めたのだそうだ。

朝礼での挨拶は数分くらいだが、その話題の内容は、「阪神タイガース」、「北朝鮮」、「SARS」、「イラク戦争」などのメディアに溢れる情報、「ガーデンング」、「犬の美容室」、「花粉症」、「散髪」、「子供の将来」、「さだまさしのコンサート」などプライベートでの日常のこと、さらには、「ごみのポイ捨て」、「思いやり」、「助け合い」、「公共精神」など道徳精神と仕事に対する姿勢を結びつけるようなテーマまで、社員の日常的な想像力が反映している。それぞれのスピーチに対して、社長が手短かにコメントをする。ときに社長の「公共精神の欠如」などのコメントは、吉野が指摘したような「文化仲介者」のような役割を連想させる<sup>(15)</sup>。

朝礼が終わると、各自が二つの業務用の長方形の折りたたみ式のテーブルに対面で座り工程会議を行う。会議では、技術部設計課設計係長である中川啓二(48)が、工程会議表にボールペンでチェックをしながら、その日の各自の仕事内容・進展の確認を行う。そして各自が今日はどこから作業を開始すれば良いのか、具体的に仕事内容が把握される。会議は午前9時には終わり、各自が担当する役所や現場に出向いたり、オフィスで事務や設計の仕事にとりかかったりする。

始業直後の女性たちには重要な任務が待っている。総務部長を務める社長夫人の真田牧子(57)、総務の狭山美智子(34)、山内美紀(33)の三人が朝のお茶汲みの支度をする。好みにあわせて、コーヒー、紅茶、緑茶、麦茶を用意して、各自の決められたコップに注ぎ、デスクまで運ぶ。好みがうるさい橋本健一(34)などは、寒い冬になると、紅茶にミルクと砂糖をたっぷり入れて、さらにレンジで加熱してほしいという要求まで出す。それに対して、女性従業員はとくに文句を言うわけでもなく、作業をこなす。

ただ、昭、武田さん、谷崎良和(37)は、家父長的な制度に反発しているのか、それとも「自己責任」の徹底なのか、他人にやってもらうのは面倒だと、各自で行っている。ただ、このお茶汲み制度であるが、2003年の夏に山内美紀が結婚して退職したことをきっかけになくなってしまった。三人のお茶汲み女性の一人が寿退社することにより、山陽コンサルタントにおける15年にも及ぶお茶汲みの伝統は崩壊したのだった。伝統が崩壊して生き残ったのは、「自己責任」<sup>セルフサービス</sup>の論理だった。

山陽コンサルタント株式会社は、下水の測量や設計などのコンサルティングを主な業務内容としている。そして、そのほとんどが岡山県南部を中心とした県全域の市町村役場や水道局など

(15) 吉野、前掲、241-243頁

の地方自治体からの委託業務である。社員の職種は、総務・営業・システム管理・設計などに分かっている。営業職を一人で担当している米田國男(54)などは、彼の営業車である白のトヨタコナで飛び出すと、夕方までオフィスには戻って来ない。彼にとっての労働における日常とはそのほとんどが車の運転といっても良いほどで、わずか2年の間で8万キロの走行距離を稼いでいる。

システム管理とCAD (Computer Aided Design) 専門の谷崎さん、武田さん、越中和子(39)、水谷裕樹(29)や総務職の真田牧子と狭山さんは、始業開始から終了まで、昼食時を除けばほとんど外出することはない。彼/彼女らにとっての労働の日常的風景は、車で移動しながら米田さんが車窓から眺めるものとは違い、静かなオフィスのなかで椅子に座り、パソコンの画面に映るExcelの図表やCADの設計図である。

設計担当の中川さん、吉田正男取締役技術部長(42)、松田啓技術部課長(41)と他の技術部設計課のメンバーである昭、吉田さん、橋本さん、山内さん、島田治夫(30)たちは、しばしば車で市町村役場や現場に出かけることがあり、パソコンの画面を眺めるのみでなく、役人を相手に仕事の打ち合わせをしたり、現場を歩いたりすることも日常の一部である。ただ、一番夜遅くまで残業しなければならないのも彼/彼女らである。公共事業の追い込みで忙しい3月末などは、一ヶ月ものあいだ休みがなく、残業で朝帰りなどの日々が続くこともあった。それでも、長い不況のなかで会社の経営状態は非常に苦しく、残業手当もほとんどつかないような状況である。休みのない日常と給与に不満を抱えつつも、日々は過ぎて行く。

### ランチタイム、吉野家、『笑っていいとも!』

正午にはパソコンの合図が昼休憩を知らせて

くれる。時間はわずか45分。もともと1時間の休憩だったのだが、保育園に子どもを迎えに行くために「少しでも早く帰りたい」という狭山さんの意見が尊重され、15分間短縮したそうだ。しかし45分では外食できる飲食店は限定されてしまう。弁当を持参していない従業員たちは郊外のロードサイド沿いに並ぶレストランに車で出かける。調査者は、若い男性を中心とした昭、吉田さん、島田さんと4人で出かけることが多かった。近所にあるローソン、セルフうどん、吉野家、COCO一番、マクドナルドなどに限定される。「早い・安い・うまい」という吉野家の宣伝文句がキーワードとなる。そしてその条件を満たすものとしてとりわけ吉野家とセルフうどんに行くことが多かった。最も重要なのは、ランチが300円前後であるということである。

吉野家はもともと創業者の松田英吉により1898年に東京都中央区日本橋の魚市場の個人商店として始まった。1973年にフランチャイズ一号店を神奈川県小田原市に出した後、2001年度実績で国内外合わせて1020軒のチェーン店を展開している<sup>(16)</sup>。岡山県には10店舗あり、そのうち7店舗は岡山市内にある。我々の通う岡山大安寺店はオープンしたばかりだった。リラックスするはずの休憩時間が、むしろ吉野家という圧縮された時空間のスタジアムで、従業員たちは資本家の家畜になったような錯覚を起こす。

慌しい家畜のような食事を終えたあとは、本屋やコンビニで立ち読みをして会社に戻る。週刊誌が発売される月曜日などはたいてい山田書店かコンビニに立ち寄る。例えばある一月末の月曜日の食後の帰りに立ち寄ったローソンでは、吉田さんは『週刊スピリッツ』、島田さんは『月刊つり情報』、昭は家具インテリア雑誌『SMART』を立ち読みするといった具合だ。みなそれぞれ自分の日常的関心をわずか3分くらいのあいだに消費

(16) 山中伊知郎『新国民食——吉野家!』廣済堂出版、2001年

する。

外食に出かけない他の従業員たちは二階の会議室で食事をする。武田さん、越中さん、山内さんの女性三人は弁当を持参している。また谷崎さんは、電子レンジで簡単に調理できるフリーズドライのインスタントラーメンや冷凍チャーハンなどをレンジで加熱して昼食としている。読書好きの彼は、一人で早く食事を済ませてしまい、自分のデスクに戻り耳栓をして、彼の好きな大江健三郎や夏目漱石、ステイブ・キングの小説を読む。それ以外の男性従業員は、会社で注文した弁当を食べる。現在「桃太郎弁当」と「ままかりキッチン」の二箇所の弁当屋から出前をとって、値段は420円。同じものを毎日食べると飽きるということで、二週間サイクルで「桃太郎弁当」と「ままかりキッチン」の弁当を食べ分ける。

昼食中の会議室のテレビでは常に『笑っていいとも!』が放映されている。社員たちが真剣に見ようが、もしくはただ垂れ流しになっているだけにしても、この人気番組『笑っていいとも!』を支えている情緒には、マイケル・ビリッグが指摘しているような「平凡なナショナリズム」のイデオロギーが潜んでいる<sup>(17)</sup>。人気番組『笑っていいとも!』は、月曜日から金曜日の午後12時から1時まで休むことなくお茶の間やオフィスのテレビ画面を占拠する。日本がちょうどバブル経済前宵を迎える1982年から2002年11月1日現在までに5150回放映された同番組は、少しの例外を除けばほとんど番組内容を変更することはなかった。

ただ、その例外に着目してみると非常に興味深いことがわかる。例えば司会者タモリとゲストのトークが行われる「テレホンショッキング」は現

在まで13回番組内容を変更したことがある。そのほとんどは、皇室関係のイベントである。その他には湾岸戦争や9・11テロ事件などがある。日常生活を送っている者たちにとってみれば、そのようなナショナルなイデオロギーの人気テレビ番組に対する優位性などは平凡なことなのかもしれない。しかし、このような例外的とされる事件がナショナルなもの結びついているという平凡な現実、ナショナルなイデオロギーが私たちの意識を圧倒的に支配しているということを象徴しているように思える。

### 午後の仕事、ラジオ、北朝鮮をめぐるジョーク

午後12時45分にはパソコンの合図が鳴り、お茶汲みのメンバーが朝と同様に各デスクまでお茶を運ぶ。このお茶汲みは午後3時にも行われ、たいていその時分には、誰かが持ってきたおやつを一緒に出す。そのような昼食を済ませたあとの午後のオフィスの時間はゆっくりと流れている。山陽コンサルタントの一階と二階のオフィスにはそれぞれラジカセが置いてあって、二階のラジカセは各自が持ち寄った洋楽と邦楽の歌謡曲や、ローカルのFM局が流されている。山陽コンサルタントでは「FM岡山」「ラジオもも」「FM香川」の3つのFM局を受信できるのだが、たいてい「FM岡山」が流れている。このラジオから流れてくるニュースも、従業員たちの日常的な知の一部である。ラジオから得られた情報は、その職場での話題として用いられる。そして、ラジオから流れてくる情報にもナショナリズムのイデオロギーは潜んでいる。

例えば、日本大手広告代理店である博報堂仙台支社が企画・製作した日本公共広告機構（AC

(17) Billig, *ibid.*, pp. 6-7. 現代日本社会における「平凡なナショナリズム」のイデオロギーの問題に関しては、以下の文献を参考にした。

響田竜蔵「「平凡なナショナリズム」と「第三世界ナショナリズム」のあいだ」『現代思想』vol.29-16、2001年、247-262頁



のコマーシャル。

川の音の流れに男性のナレーションの聲が入る。

「山形県銀山温泉。カリフォルニア生まれのジニーさんが嫁いできたのは10年前。」

そしてジニーさんの流暢な日本語。

「日本人はね、自分の国のいいところ、たぶん忘れていていると思います。」

そしてナレーションの男性の声。

「ニッポン人が日本を知ること。国際交流もそこから始まります。」

そして最後に女性の声。

「AC」<sup>(18)</sup>

ACのコマーシャルは1971年から製作されていて、そのテーマは、公共マナー・環境問題・福祉問題・資源問題・教育問題・骨髄バンク・子どもワクチン・読書推進など多岐にわたる。その広告作成は広告代理店によって担われているが、アメリカ人の女性であるジニーさんが日本の良さを再発見するところに逆オリエンタリズムの発想を垣間見るのは難しくはない。このような、日本人であることを誇ることは当たり前のことであるという認識に基づいた言説は、直接に排他的なナショナリズム意識を煽るようなものではないが、そこで許容されている情緒的な感情こそがナショナリズムを自然なものとして規定している。そして、何気なく垂れ流しになっているラジオであるが、従業員の耳にはちゃんと届いているようだ。六月半ばのある雨模様の午後には橋本さんがジニーさんのアクセントを真似たユーモアの感じられる発言をした。

「吉田君たくさん良いところありますので」

それは、橋本さんが最年少の吉田さんをからかうために発した言葉に過ぎないのだが、ACのコマーシャルがはっきりと消費されていることが示されている。ただ、このケースの場合、橋本さんは「自分たちの関心事の詩人」<sup>(19)</sup>であり、むしろ日常生活や退屈な仕事をより潤滑にするための気の利いたジョークであると考えられることができる。彼のラジオコマーシャルの言説の流用は、ACの思惑とは全く違い、むしろ日本人でも吉田君でもそのようなことはどうでも良いという無意識的なメッセージとも読み取ることができる。

しかしながら、「自分たちの関心事の詩人」の詩がジョークにならない場合がある。2002年の9月17日に小泉首相が北朝鮮を訪問して「拉致事件」が発覚して以来、「北朝鮮」・「拉致」・「金正日」・「テポドン」等の言葉で、「野蛮」で「危険」な「テロ国家」としての北朝鮮というイメージがニュースからワイドショーまでメディアでは流れていた。また本屋やコンビニで売られている金正日、北朝鮮、朝鮮総連などの批判本は、「北朝鮮本」として一つのジャンルを成していた。

しかしながら歴史家の和田春樹が述べるように、そこでは「日本が過去朝鮮民族に対して植民地支配を通じてあたえた損害と苦痛についてはまったくかえりみず、朝鮮戦争以後の日朝の敵対的な状況についても一切ふれず、在日朝鮮人に対するくりかえされる圧迫、いやがらせにもほとんどふれることがない」<sup>(20)</sup>のである。

山陽コンサルタントでも例外ではなく、従業員

(18) 社団法人公共広告機構 AC オフィシャルサイト (<http://www.ad-c.or.jp/> : 2004年3月1日)

(19) ミッシェル・ド・セルターは、現代社会における消費者の「知られざる生産者」としての主体性を、人々の日常実践のなかから掘い出すことを試みている。自分たちの関心事に引きつけて行われる人々の消費は、生産者側のコード化された言語を内面化して再生産するのではなく、詩的なものへとつくりかえていく営みなのである。

ミッシェル・ド・セルター『日常実践のポイエティック』(山田登世子訳) 国文社、1987年、24頁

たちはメディアで報道されている北朝鮮をめぐるイメージを日常会話で消費する。2003年の2月24日、北朝鮮は日本海沿岸で、地対艦ミサイル「シルクワーム」を発射した。その翌日、私の向いのデスクでパソコンを眺めながらの橋本さんの発言。

「北朝鮮は何をしてくるかわからんが」

また連日の深夜過ぎまでの残業が続いた4月のある日の午後（アメリカバグダッド空港占拠前日）、橋本さんは無断欠勤して、自宅にも携帯電話でも連絡を取ることができなかった。橋本さんを心配しながらもジョークが飛び交う。

「北朝鮮に拉致されたんじゃねーか」

山陽コンサルタントの従業員たちの職場の空気を和らげるための試みには、詩的なオリジナリティは欠如していて、被害妄想的な認識によってナショナリズムが消費されている。そのような情緒的な会話に潜んでいる論理においては、とても身近な日常の内部で起きた問題が短絡的に国境上での脅威と結びつけられている。ガッサン・ハージがオーストラリアの多文化主義の文脈において「善良な寛容さ」に潜むナショナリズムの問題を指摘したように、社員のそのような空間認識には、「ナショナルな空想」(National Fantasies) が機能している<sup>(21)</sup>。

オーストラリアの多文化主義的文脈ではな

く、日本と朝鮮半島という特殊な歴史的背景を抱えているとしても、例えば北朝鮮に対する嫌悪が伝染した結果として生じるチマチョゴリを着た朝鮮学校の女子生徒に対する暴力や嫌がらせは<sup>(22)</sup>、ハージの挙げた「邪悪な白人ナショナリスト」の例と非常に似ている。ただ、多文化主義が国家的に奨励されていない日本社会における文脈の場合、オーストラリアの文脈における「善良な寛容さ」の裏側としての「邪悪な白人ナショナリスト」というハージのモデルを参照にしながら、日本と朝鮮半島をめぐる歴史・社会的な文脈を合わせて考える必要がある。

さらに、これまで議論してきたように、日常生活におけるナショナリズムとその実践は、ますます「周縁化」されている。被害妄想に満ちたナショナリズムは表面化するよりも、平凡な日常を過ごす個人が抱えている不安やストレスのなかに潜んでいる。洗練された消費者として日常を過ごす者たちにとって、露骨なナショナリズムや「他者」を排除するような実践は、消費社会に適合的でないという意味で「クール」ではない。そうであるから、同僚の「笑い」を誘うジョークが選択される。会社という小さな集団のためにポジティブな貢献をすることによって社会的排除は隠蔽される。

また、被害妄想に満ちたナショナリズムの実践を検討するうえで重要なのは、そのような認識をはらんだ発言が毎日繰り返されているわけではなく、何かとても身近で実感のある出来事を契機に、ジョークとして噴出するということである。

(20) 和田春樹・高崎宗司編著『北朝鮮本をどう読むか』明石書店、2003年、9頁

(21) ガッサン・ハージ『ホワイトネイション——ネオ・ナショナリズム批判』（保莉実・塩原良和訳）平凡社、2003年、59-61頁  
ハージは、イスラム女性教徒のスカーフを剥ぎとるというレイシストの実践をナショナリストの実践として捉えている。そしてその理論的根拠を以下のように説明している。「つまりこうした実践は、第一にナショナルな空間のイメージを、第二にそのナショナリスト自らがナショナルな空間の支配者であるというイメージを、第三に「エスニックな他者／人種的な他者」が、この空間にとって単なる客体でしかないというイメージを想定している。」

(22) 在日コリアンの子どもたちに対する嫌がらせを許さない若手弁護士の会編『在日コリアンの子どもたちに対する嫌がらせ実態調査報告集』在日コリアンの子どもたちに対する嫌がらせを許さない若手弁護士の会発行、2003年

つまり、「自分たちの関心事の詩人」は、日常的に身のまわりで起きている実感の持てることに置き換えて、メディアで取り上げられている事象を解説しようとしているのである。さらには、先述したように、そのようなナショナリズムの実践とは、集団に属する者たちにとって有益なものではなくてはならない。ゆえにそれは、排他的な実践ではなく、集団のために良い貢献として受け入れられるのである。人々は排他的な発言や実践そのものを好き好んでいっているわけではない。それが有益な側面があるから排除を許容するのである。そのような例をもう一つ挙げてみることにする。

北朝鮮籍の旅客船「万景峰92」の新潟港入りに抗議して、岡山市駅前町にある朝銀西信用組合で銃撃事件<sup>(23)</sup>のあった数日後、事件現場からわずか200から300メートルばかり離れた居酒屋で、寿退社する山内さんの送別会を行った。その後の二次会で、居酒屋から歩いてすぐの「Blue Moon」というバーでの会話。連日のようにメディアで「万景峰92」と「救う会」による抗議のニュースに溢れていた二次会の席では、時事的な話題は身近に共感できるネタとして語られる。実際に、吉田さんと橋本さんは、「マン・ギョン・ボン・ゴウ」という朝鮮語のエキゾチックな名称を発声するのを楽しみながら、その名前を酒宴の話題にする。そして、石川県出身の松田さんに対して次のような発言。

「石川でも拉致されるんじゃないん？」

酒の肴になったのは、拉致事件のあった新潟県に隣接して、日本海に面した石川県出身の松田さんだ。ここでも、日本海という国境における不安

をめぐる問題が、彼/彼女らが実感を持って知っている松田さんに置き換えて語られている。しかしながら、もしもそのような発言をナショナリズムであると批判しようとするばどうだろう。ジョークを述べている当事者にとって「いま・ここ」にいる松田さんについて語っていることが面白いし、それは場を盛り上げるネタに過ぎないのであって、「北朝鮮」や「万景峰92」のことはどうでも良いことなのだとするだろう。

しかしながらそのような短絡的な想像力にはかなり深刻な問題がある。そこにおいては、自分の知っている情報だけで「他者」を理解するというのみならず、それがまるで商品であるかのように消費されてしまっている。そこにおいては、日本と朝鮮半島をめぐる歴史や社会的関係性のみならず、松田さんの歴史や社会的存在さえもどうでも良いことであると考えられている。つまり、職場の同僚として松田さんは存在するのであって、それ以外の側面というのはどうでも良いことなのである。

それは、アルコールを交えながら不安やストレスから解放されてリラックスしている、「我々の」日常を維持することが大切なのであって、他のことはどうでも良いではないかという従業員の歴史や社会に対する苛立のようにも感じられる。つまり、新自由主義のなかであくせくする従業員たちにとって、今、この現実に対応することで精一杯で、歴史や社会について考える暇はないのだ、と。だから、従業員たちの言説は「他者」への社会的な排除を要請しているのである。つまり、従業員たちの不安やストレスの解消は、「他者」を排除することによって成立している。

北朝鮮に対する排他的な被害妄想に満ちたナ

(23) 2003年8月23日午後11時頃、在日コリアン・コミュニティのある岡山市駅前町にある朝銀西信用組合本店に銃弾が撃ち込まれた。「ケンコクギユウグン」、「チョウセンセイバツタイ」と名乗った犯人の犯行声明は、「無法国家の北朝鮮の工作船が明後日新潟港に入港する。心ある日本人の抗議だ。北朝鮮に反省がなければこれからもエスカレートする」というものだ。彼らの犯行声明には、想像上の国境外の敵と国境の内側にいる敵とが繋がっていて、短絡的に内側にいる敵に国境外の敵が投影されてしまっていることを窺うことができる。

シヨナリズムは、金正日や北朝鮮に住んでいる人々に対してのみ働くものではない。むしろ、そのような情緒的なナシヨナリズムが直接に国境の外で暮らすもの実践されることはない。戦時中の強制収容所などの歴史や先述した在日コリアン・コミュニティの銀行への銃撃事件に明らかのように、ナシヨナリズムの暴力はまず国境内で生活している容疑者に対して実践される。しかしそのようなナシヨナリストたちは、こちらから探そうとしても見つけることのできるものでなく、一方的にその排除の対象となる容疑者に訪れる。そして、山陽コンサルタントの詩人たちのように、自分たちだけが共感できる関心事を楽しむジョークという「他者」への配慮が欠如した営みのなかに潜んでいる不安やストレスは、特定の時・場所・対象者に暴力として訪れる。

例えば山陽コンサルタント株式会社から東に3キロほどの、岡山市の中心市街地にある地方新聞社の関連会社に勤務している、在日コリアン4世である金村成美(26)の場合、小泉訪朝以来の「拉致事件」発覚以来、職場における同僚との会話で北朝鮮への差別的発言に同意を求められて、「気が気ではなかった」そうだ。彼女のように日本の会社で働いている場合、自分が「在日」であることをカムアウトしていないことがほとんどである。とりわけ、日本の教育を受けて育ち、日本語が流暢なオールド・カマーで、見た目でも外国人であることが判断できない在日コリアンの場合、露骨な差別よりもむしろ、自分の出自を明かすことが許容されていない日本社会の現実そのものが、ナシヨナリズムとして機能している。彼女も、同じ職場では、仲の良い女性の同僚一人にしか自分が在日コリアンであることを告げていない。

そのような彼女にとって、酒宴の詩人たちのジョークによるナシヨナリズムの実践は、平凡な日常のなかで突然として身体を襲う暴力以外の

何ものでもない。つまり、グローバル資本と新自由主義に追われている従業員たちの潤滑油であるからといって、生活改善のために歴史や社会性を無視することは社会的排除をとめない「他者」への暴力として実践される。それはマジョリティの不安やストレスをジョークという形式で被害妄想的に「他者」へ押し付けているに過ぎない。そしてそのような暴力が引き起こすものとは、「他者」が存在することに対する権利の「剥奪」なのである。成美の事例を参照するならば、在日コリアンとしての彼女の存在意義そのものを「剥奪」することによって、マジョリティの存在意義が回復されているのである。

### 北朝鮮バッシングのあとのノスタルジア

山陽コンサルタントの従業員たちの暴力的なジョークは嵐のように去り、平凡な日常の午後へと溶けていく。ラジオから懐メロでも流れてくれば、「懐かしい」歌への感傷をめぐる会話が始まる。フィールド調査中にはたくさんの懐メロがFM岡山から流れてきたが、特徴的だったのは、その曲の多くがそんなに昔でない80年代後半から90年代にかけてのものが多くあった。ある一月末日の定時終了間際のFM岡山からは、1995年に大ヒットしたテレビドラマ『ロングバケーション』の主題歌であった、久保田利伸の『LA・LA・LA Love Song』が流れてきた。

懐メロが流れてきたときには「懐かしい」という言葉も漏れることもあるのだが、このときは誰も声を出さずに、パソコンに向かい作業を進めながら定時終了前のひとときを過ごしていた。私の隣で作業していた山内さんは、久保田利伸のファンらしく、倉敷に10年ぶりに来るコンサートの予約受付がラジオのアナウンスで始まると、携帯電話から予約を入れようと必死になっていた。忙しい日常というのは、あまりにも早く過ぎ去った従業員たちのノスタルジアを喚起するようだ。

確かに、懐かしい音楽を聴くことにより、毎日の忙しい日常生活で忘れていたことを思い出すのかもしれない。そこにはアボリジニ歴史家の保莉実が述べているような日常的な歴史実践の営みへのヒントがある。保莉は、「本来の目的や、ものついでや、方便や、偶然や、義務なんかが複雑に絡みあって行われている日常実践のなかで、身体的、精神的、靈的、場所的、物的、道具的に過去とかがわる = 結びつく行為」を歴史実践であると述べている<sup>(24)</sup>。そのような視点を援用すると、人々は実に多様なあり方で世界史やそこで生活する人々の社会へと開かれているのである。

しかしここで問題なのは、武田さんがそのような「懐かしい」といった感覚へと誘われたのは、ラジカセから音楽が流れてきたからであり、自発的に自らの歴史を振り返り、それが「他者」の抱えている歴史や社会的背景へと開かれていくような歴史実践ではないことである。つまり、久保田利伸のコンサートのプロモーションがあるから、「懐かしい」音楽はFMを通じて流れてくるのである。そこではポピュラー音楽から引き出された断片的で個人主義的な歴史を思い出すことにより、忙しい日常を顧みるといふ人々の自発性を奪い、むしろ「懐かしい」感覚だけが消費されてしまっている。彼女が思い出したかもしれない記憶は、社会で共有されるものではなく、彼女の個人的なプロフィールに属するものになってしまう。

そしてその背景にあるのは、CDの売りに悩むレコード会社のマーケティング戦略である<sup>(25)</sup>。そのような場面では、「懐かしい」記憶や経験をめぐる歴史・社会的な冒険よりも、「いま・ここ」

で個人が消費できるような記憶が思い出されていることのほうが重要であると考えられている。忙しい日常生活のなかで大切なことを失ってしまったという喪失感覚は、ただ単純に音楽のリズムへと回収されていく。忘れてしまっていることを思い出すことは、そのようにして回避され、「他者」との歴史・社会性へと導かれることはない。懐かしい音楽に癒されることによって。

## グローバルゼーション、残業、消費者的主体

午後5時30分のパソコンの合図が定時終了を知らせる。すると保育園に娘を預けている狭山さんは、一階と二階で働く社員たちに「お先に失礼します」と帰宅する。しばらくすると社長夫妻、OAシステム係りの人たちが比較的早い時間に帰宅する。その他の社員も特に残業がなければ定時には帰宅できるのだが、たいてい午後8時から9時くらいまでは仕事をしており、遅ければ深夜まで働くことも珍しくない。他の多くの日本の中小企業と同様に、山陽コンサルタントも当時は不況で、残業手当はほとんどつかなかった。従業員は、自分のプライベートの時間を返上して、無償で会社のために貢献する。とりわけ忙しかった4月初旬のある日には、昭と島田さんは午前4時まで仕事をしていた。私は橋本さんに週末の予定を尋ねた。

「間違いなくここにおけるじゃろーな」

皮肉が込められた橋本さんの言葉には、不満を抱えながらも、残業手当もつかず、土日出勤も当然という状況に対して積極的に抗おうという意欲は窺われない。大企業とは異なり中小企業で

(24) 保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、2004年、20-21頁

(25) 社団法人日本レコード協会「統計データ」(<http://www.riaj.or.jp/>; 2004年2月28日)によれば、1998年をピークとして、CDの売り上げは4億5717.3万から3億1526.7万へと落ち込んでいる。

は、お互いのことを良く知りつくして、家族的な雰囲気に含まれている。山陽コンサルタントも例外ではなく、社員たちは会社のみならずプライベートでも交流がある。仕事が終わった後や休日には一緒にバドミントンやサッカーをしたり、ケーキ教室に通ったり、釣りに出かけたりする。

その一方で雇用者である社長は、労働環境をめぐるコミュニケーションにおいては、個人面談を行うなどして、社員から直接に話を聞き、信頼関係を築こうと努力している。その理由は、社長自身が以前勤めていた大阪の会社の雰囲気が好きでなく、「家族的な」会社をつくりたいという思いがあったからだそうだ。しかしながら、「家族的な」会社には、家族の一員であるがゆえに、雇用者と従業員との関係に収まりきれないジレンマが発生することも多い。

グローバル化という標準化に向き合わざるをえない山陽コンサルタントにおいて、そのような「家族的な」関係は従業員の余暇を無償で回収している。そのような局面に焦点を当てると、社員の被害妄想に満ちたナショナリズムとグローバル化におけるナショナリズム、さらには新自由主義時代における主体の問題が重層的に絡み合っている結節点が浮かびあがってくる。

2003年度から山陽コンサルタントでは、平日の定時以降と週末を使ってISO(国際標準化機構)9000ファミリーの勉強会が行われている。そして、各自が自分の専門分野における、ISO9000ファミリーを講義するかたちでの勉強会を行っている。例えば12月中旬の木曜日の午後5時30分から、越中さんが講師として、CADに関連したISOについて講義する。越中さんの発表に対して、社長や年輩の従業員が随時質問するという形式で、社員全体での知識を深めていくことが試

みられる。

ISOは1947年にスイスのジュネーブに本部を置く非政府機関として設立され、1970年代後半にはイギリス・ドイツ・アメリカなどにおいて品質管理や品質保証の重要性が認識されるようになる。ISO9001の場合、1994年に制定されて以来、電機メーカーなどの大企業はヨーロッパを中心とした海外に輸出する際には取得が不可欠なものとなっていった。さらに1996年に建設省がISO9001をパイロット工事に導入して以来、最近では地方自治体も公共工事にISO9001の取得を資格条件としており、建設業に携わる中小企業では生き残りをかけて取得が目指されている。そして注目すべき点は、1987年版、1994年版で表題に謳われていた品質保証という言葉が消えて、品質マネジメントという言葉に変わり、品質保証のみでなく顧客満足の向上を目指していることである<sup>(26)</sup>。

この変化が示しているのは、経営者のみならず、従業員もまた顧客＝消費者に向き合う必要が発生するということである。このような傾向に対して渋谷望は、新自由主義が「生産社会から消費社会への転換というコンテキスト」において、従業員自身の「経営参加」を促し、「労働者が想像の上でつねに顧客と向き合うこと、さらには顧客になりきることを要請する」ことを指摘している<sup>(27)</sup>。つまり、一人ひとりの従業員は、経営者であると同時に消費者であるような主体であることを要請されることになる。

そのような労働・消費様式の変化は、山陽コンサルタントの従業員の日常生活にも反映している。つまり、従業員たちは一方で消費者のニーズに合わせるために、ISOの取得を目指して、もう一方で消費者としてその構造を補完している。

(26) (社)日本技術士会中部支部プロジェクトチーム中部技術支援センター編『中小企業のためのやさしいISO9001の取り方』第2版、日刊工業新聞、2001年、2-11頁

(27) 渋谷望『魂の労働——ネオリベラリズムの権力論』青土社、2003年、33-43頁

例えば、従業員たちが昼食に訪れるセルフうどん屋の場合、自らうどんの大・小を選択して、熱湯で麺を湯貸して、トッピングのをせ、つゆを足して、出来上がりである。食べ終わったら、スープと端を分別して捨てて、店を出る。これらの日常的な消費活動を通して、社員たちは、新自由主義の要求する顧客像を内面化するとともに、経営者による経営コスト削減を補完している。このような日常的な労働と消費の規律を通して、グローバル化に適合的な消費者的主体が構築されていくのである。

このように、グローバルに展開するナショナリズム現象を地方都市の従業員の日常から眺めてみると、国際基準に合わせるために、定時以降の時間や週末を返上しなければならない従業員一人ひとりの日常生活や、労働と消費を通じた主体の構築が浮き彫りになる。中小企業の従業員のナショナリズムとは、ハージが述べているようなグローバル化における「内なる難民」の日常的な世界の内側を意味づける実践なのである。そしてこれまでみてきたように従業員たちの被害妄想的なジョークは、まさにそのような日常生活のなかで織り成されているものなのである。つまり、ナショナリズムの実践を促しているのは、グローバル化や新自由主義のもとで適合的な消費者的主体を維持することによって生じる不安やストレスによって生み出された被害妄想を「他者」に投影することによって「我々」の日常を維持するというメカニズムなのである。

## おわりに

「被害妄想的なナショナリズム」との批判的対話に向けて

山陽コンサルタントの従業員と日常生活をともにするなかで感じられたのは、彼／彼女らは、北朝鮮バッシングの言説を消費し、ナショナリズムを実践するわけだが、それらは単に悪意に満ちた実践ではないということだ。彼／彼女らが

北朝鮮や在日コリアンに対して積極的な敵意を持っているというわけではなく、自分たちの主体を維持する、あるいは保守する結果として、「他者」への被害妄想と排除が要請されるのである。そして、先述したような職場における北朝鮮をめぐるジョークには、グローバル化のなかで適合的な主体になることの困難さが被害妄想意識を醸成することになる。しかし、そのような被害妄想意識も、ジョークという集団への貢献へと変化することにより、自分たちの内側には被害が及ぶことのないように最小限の例外的な被害によって食い止めることにより正当化されることになる。その結果、社会的排除という例外を外部に設けることにより、自分たちの主体が成立するわけである。

そのように考えると、彼／彼女らの選択は、ナショナリズムが新自由主義に適合的な、国家の福祉に頼ることなく「自己責任」で生きていくことのできる個人主義的な主体を要請していることに対する応答なのである。つまり、新自由主義という現実から発生する不安やストレスに耐えるための精神安定剤として、社会的排除が許容される。結果的に、そのような現実逃避そのものが、過去や現在をめぐる人々の対話やコミュニケーションの障害となっていて、人々の個人的選択の結果によって生じた団結力は、国家のメカニズムや意思へと置き換えられてしまう。つまり、社会的排除とは、「他者」の存在意義を「剥奪」するのみでなく、自分たちの想像力をも「剥奪」されることを意味するのである。

「被害妄想的なナショナリズム」は、グローバル化時代に「難民」化している人々が、その圧倒的な価値観に対して「他者」との協働を諦めているところに、その出発点があるといえる。そして、その諦めが国家の求めている個人主義イデオロギーと結びついてしまう。グローバル化時代において適合的な主体になるための競争に参加し

て、自分たちよりさらに弱い者の存在を想像上に担保することによって、ぎりぎりのところで上昇志向が確保され、マジョリティへと自らをアイデンティファイすることができる。まさに、自分より弱き「他者」の希望をジョークによって「剥奪」することによって、自分たちの想像上の希望を維持することが可能となっている。よって、そのような「被害妄想的なナショナリズム」と批判的な対話をするという場合、そのようなマジョリティのある種の諦念と上昇志向の歪な出会いとして成立する個人主義イデオロギーこそが自分たちの不安やストレスを生んでいる加害者であることを指摘せねばならないであろう。

そのために誰でもできることがある。それは、まず親密な関係にある、直接的に知っている「他者」に向き合ってみることである。自分を取り巻く日常的風景や人々に対して興味を持つことである。私たちが、全く関係のないと思い込んで

いる、あるいは「剥奪」や排除に関係しているかもしれない「他者」に出会うためには、自分の中の内なる不安に向き合うことよりも、まず身近な存在である「他者」と社会的なものを共有しようとする行為そのものに向き合う必要があるのではないだろうか。つまり、それは自分の生活世界に存在している親密な人々の他者性へと目を向けることである。私たちと親密な関係にある「他者」が共有している社会的なものの存在に出会うとき、私たちは、出会ったことのないこの広い世界に住む「他者」の存在との繋がりに気づくはずだ。そしてそのとき、私たちは見知らぬ「他者」の存在意義の「剥奪」が、私たち自身の存在意義の「剥奪」であるということに気づかざるをえないだろう。これは、親密な「他者」と知らない「他者」との優先順位の問題ではない。なぜなら、この広い世界の外部など存在しないのだから。